

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 24 日現在

機関番号：32643

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06623

研究課題名(和文)日本古代の王権と交易掌握

研究課題名(英文)Takeover of the trading posts by the government of ancient times.

研究代表者

宮川 麻紀(Miyakawa, Maki)

帝京大学・文学部・講師

研究者番号：60757079

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：これまで、日本古代国家は水田を支配することにより、統治する地域を広げていったと考えられてきた。しかし実際には、王族や豪族が交易する場所を開発することにより、全国を支配するようになっていったという新説を出した。本研究は、日本古代国家が流通経済によって支えられていたことを明らかにするものである。そして、現在忘れられつつある各地域の歴史を復原することにより、地域社会の活性化を目指すものである。

研究成果の概要(英文)：According to one popular theory, the government expanded their territory by bringing the paddies under control. But in fact, the royal families and the local ruling families exploited the trading posts and got many regions under control. This research revealed that there were a lot of trading posts which supported economy of Japanese ancient state. Also, I aimed to construct the history of several regions which were fallen into neglect, and achieve the regional activation.

研究分野：日本古代史

キーワード：日本古代史 地域史 交易 開発 歴史地理学

1. 研究開始当初の背景

日本古代国家の支配の在り方について、従来は水田の開発とその支配を中心に研究されてきた。しかし、交易拠点の開発も盛んに行われており、流通経済の側面から古代社会の形成や特質を捉えなおす必要がある。

律令国家財政は交易物やその運送ルートに支えられており、その淵源はヤマト王権にある可能性が高い。また、王権が掌握した交易拠点は平安時代以降も摂関家や寺院の荘園として引き継がれ、中世社会の基盤となったことが想定される。水田経営にばかり注目されがちな荘園であるが、遡ればヤマト王権の交易拠点として開発されたものである可能性や、律令国家成立以降も流通網を形成して国家財政を支えた可能性について、検証を進める必要性がある。

なお、本研究に関連の深い先行研究として、以下の二つが挙げられる。それは、寺院の所領からヤマト王権の所領を復原する研究手法(吉川真司「小治田寺・大后寺の基礎的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集、2013年)と、平安時代の史料から王権の所領を復原し、現地調査によって地理的条件も併せて検討する手法(足利健亮・金田章裕・田島公「美濃国池田郡の条里」『史林』70-3、1987年)である。本研究では、これらの研究を発展させ、一つの学問分野として確立したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次の2点である。まず、日本古代国家の形成・変容過程を解明することである。これは、現代日本の淵源である日本古代国家の形成過程や、その後の変遷を追うことである。特に、国家運営を支えていた流通経済が創出される過程や、中世社会に至るまでの変遷を解明することが目的である。そのためには、王権が列島各地の交易を掌握していく過程を明らかにする必要がある。

次に、日本古代社会の特質と東アジアにおける独自性を追究することである。各地の交通の要衝には市や津が発生しており、ヤマト王権により設置された交易拠点は、その後の日本古代社会の形成に大きな影響を与えたといえる。そこで、日本古代社会の特質を流通経済のあり方から明らかにし、これまで行ってきた日唐比較研究と合わせて、東アジアにおける日本古代社会や流通経済の独自性を提示することが目的である。

3. 研究の方法

ヤマト王権による交易拠点の形成とその奈良・平安時代を通じた展開について、以下のAからDの実例から検討し、最終的には日本列島における交易拠点の確立と、それを通して日本古代国家の形成過程を解明する

計画であった。A.ヤマト王権の中枢部の事例(奈良県) B.王権の中枢に近く、渡来系氏族を利用した先進的な開発が見られる事例(滋賀県) C.西国に置いた支配拠点の事例(岡山・福岡県) D.王権の経済を支えた東国の事例(岐阜・埼玉県)。ただし、Cの岡山県とDの埼玉県の事例は当初の計画よりも難航し、結果としてそれ以外の地域についての検討にしばって計画を進めることとなった。研究の方法は以下の通りである。

まず、主要な関連文書の釈読をし、各荘園や支配拠点が形成された経緯を明らかにする。そのうえで、関連地名を抽出し、当該地域の地図を作成してそこに地名などの情報を書き込む。次に現地踏査し、地形や地名を確認してその成果を地図に反映させる。

これらの作業を通して、当該地域がヤマト王権によりどのように開発され、律令国家形成にどのような影響を及ぼしたか検討する。特に、A大和国の事例からは、王権中枢部を支えた王家の所領の特質を明らかにし、B近江国の事例から、王権が中枢部に近い地域へ渡来系氏族を投入して開発していく様子を明らかにする。また、C西国の事例から、大宰府および朝倉宮周辺の交通路や輸送路について明らかにする。D東国の事例から、ヤマト王権との密接な関係が構築される過程を明らかにする。

最後に交易拠点の掌握がヤマト王権の支配や律令国家の成立に与えた影響を明らかにし、日本古代国家の特色を考察する。

4. 研究成果

AからDの実例の検討から、以下のような成果を得ることができた。

A.ヤマト王権の中枢部の事例(奈良県)
正倉院文書に登場する「丹波宅」は、大和国山辺郡(天理市丹波市町)に所在した興福寺領荘園の丹波荘であったと考えられる。丹波宅は藤原不比等の娘である光明皇太后が発願した法華寺阿弥陀浄土院金堂の造営事業に利用されており、光明と密接な関係をもつ宅であった。そして、藤原氏の氏寺である興福寺へと施入されたと考えられる。

丹波宅が所在した山辺郡石上郷は、ヤマト王権の軍事的・政治的拠点であった。丹波宅は石上に存在した豪族の所領を継承したものである。現地踏査の結果、この地域は上ツ道や山辺道と竜田道の延長線との結節点であり、布留川も流れていることから、水陸交通の要衝であることが裏付けられた。付近に石上の市が所在したことから、交易拠点として機能したことがうかがわれる。

B.王権の中枢に近く、渡来系氏族を利用した先進的な開発が見られる事例(滋賀県)

近江国野洲郡(滋賀県守山市)の淵荘を検

証した。大安寺領の淵荘は舒明・天武・聖武天皇が施入した土地から成る。つまり、大王家により開発された所領を淵源とすることが分かる。そして、淵荘は琵琶湖や境川（野洲川の旧流路）の水上交通と、古代東山道の陸上交通との結節点に設けられた所領であり、特に米の輸送を担ったことがうかがえる。

この付近には、ヤマト王権により設置された葦浦屯倉が所在しており、淵荘はこのミヤケに遡らせることができる。すなわち、この地域は王権の物流の拠点として開発されたといえる。さらに、その開発には文忌寸氏など渡来系氏族の知識や技術が投入されたと考えられ、当該地域は先進地域として開発の進んだ地域であったことが判明した。

C.西国に置いた支配拠点の事例（福岡県）

筑前国の観世音寺領把伎野（福岡県朝倉市）について検討した。この所領は、斉明天皇の朝倉橋広庭宮の所領が施入されたとする説もある。いずれにしても、もともとヤマト王権の運送・交易拠点として開発された地であった可能性が高い。

当該地域は大宰府を後方から守る位置にあり、重要拠点であったことが分かる。それ以外にも、古墳群の所在する八女地域と道路でつながっており、肥後方面や豊後方面へと続く道路が通過している。水上交通路についても、有明海とつながる筑後川が流れていることから、水陸交通の結節点であったことが判明した。したがって、ヤマト王権の政治的・軍事的な重要性のみならず、運送拠点としても開発された要地であったことがうかがえる。

D.王権の経済を支えた東国の事例（岐阜・埼玉県）

美濃国の茜部荘（岐阜県岐阜市）について検証した。茜部荘の淵源は、桓武天皇の勅旨田を東大寺へ施入したものとされる。「美濃国茜部荘司住人等解」（『平安遺文』3巻-702号）によると三宅寺が近接し、住人にはミヤケの守衛にあたったと推定される「守部」という氏族の子孫がみえる。したがって、茜部荘の地には、大王家のミヤケが存在していたことがうかがえる。

当該地域は長良川や木曾川の水陸交通とも関係が深く、東山道との関係性も考慮しなければならないことが判明した。また、『日本霊異記』に登場する美濃国の小川市が、茜部荘の北方にあったと推測できる。これらのことから、当該地域は水陸交通の結節点であり、ヤマト王権により開発された交易拠点であったことが判明した。

以上の事例の検討から、ヤマト王権が各地の水陸交通の要衝に運送・交易拠点としてミヤケを設置するとともに、豪族もその近くに

同様の拠点を設ける場合があることが明らかとなった。日本古代社会は、こうしたヤマト王権および律令国家により開発された運送・交易拠点に支えられていた。そして、それらの拠点が形づく交通網により、流通経済が形成され発達しており、そのような基盤の上に律令国家の財政や経済が成立したといえる。

本研究からは、奈良・平安時代の社会が、ヤマト王権により開発された流通経済を背景として成り立っていたことが明らかとなった。従来、古代の流通経済は未発達であり、専門的な商人もほとんど存在しなかったと考えられてきたが、むしろ、王家や貴族・地方豪族によって流通経済が開発されていたといえるのであり、流通経済史研究の重要性を指摘することができたと考えている。

なお、本研究では韓国へも調査に行き、百済の都であった扶余で遺物や扶蘇山城、定林寺などの見学を行った。また、中世日韓交流史の研究者である成均館大学の高銀美准教授と意見交換し、新安船の遺物から日本・高麗・元の交流について教示していただいた。その結果、高句麗・百済・新羅が日本（倭国）に与えた影響の大きさや、海外との貿易の在り方について知見を得ることができた。ただし、経済の特色についての日本と朝鮮半島諸国や中国との共通点や相違点は、今後の課題としていきたい。

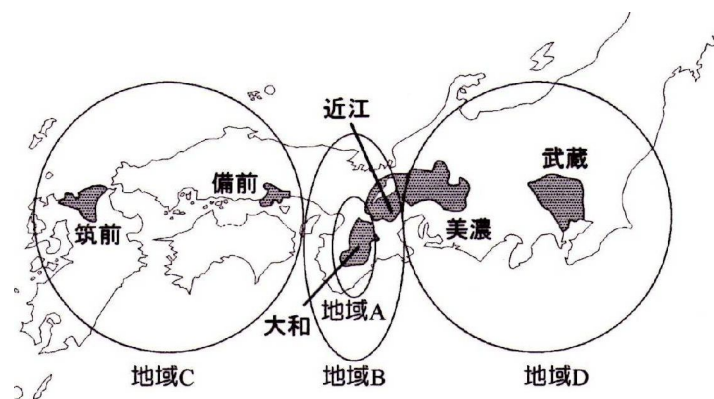


図1 調査地域の位置

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

宮川麻紀「律令国家の財政と流通」(『歴史と地理 日本史の研究』第249号、2015年、査読有)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

宮川麻紀「近江国野洲郡の開発と交通 東山御文庫所蔵「近江野洲郡寺領文書写」の検討」(『日本古代の地域と交流』臨川書店、2016年、pp69-95)

宮川麻紀「ヤマト王権の政治と外交」「飛鳥時代の政治と文化」「律令制導入への道」(木村茂光・小山俊樹・戸部良一・深谷幸治『大学でまなぶ日本の歴史』吉川弘文館、2016年、pp14-30)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮川 麻紀 (MIYAKAWA, Maki)
帝京大学・文学部史学科・講師
研究者番号: 60757079

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし